

令和4年度 本郷中学校  
第1回 入学試験問題

国語

(五〇分 満点…一〇〇点)

注 意

- 一、指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 二、答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三、字数指定のある問題は、特別の指示がない限り、句読点、記号なども字数に含まれます。
- 四、用具の貸し借りは禁止します。
- 五、指示があるまで席をはなれてはいけません。
- 六、質問があれば、だまって手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七、試験が終わったら、解答用紙だけ提出しなさい。問題は持ち帰ってもかまいません。



【二】 次の①～⑤の——線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みをひらがなで答えなさい。なお、答えはていねいに書くこと。

- ① 彼が会長に立候補すると専らの噂だ。
- ② 年長者をウヤマいましょう。
- ③ 彼はいつもホガらかな顔で笑う。
- ④ 安全性のケンサを行う。
- ⑤ 大けがを負って海軍をジヨタイした。

【二】次の文章は、松村圭一郎『はみだしの人類学 ともに生きる方法』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

1 学生に「日本文化とは何ですか?」と聞くと、みんな同じように答えます。着物や華道、茶道、相撲、歌舞伎、侍、侘び寂び……。(1)でも、教室に着物を着ている人は一人もいません。ふんどしをつけている人も、歌舞伎役者も、ちゃんまげ頭の人もいません。

だれもその「日本文化」にあてはまらなくても、それらが日本人の固有の文化だと信じて疑わない。不思議なことです。もともと武士階級の侍なんて、全人口からみればごくわずかでし、庶民は絹の着物を身につけることが禁じられていました。極端な話、いまも昔も一部にしか存在しなかった要素であっても、日本人の文化だと考えることは可能なのです。

「日本人」というのは「器」であつて、何がその「なかみ」として差異を構成するのは時代によって変化します。そうしてなかがみも変化しても、日本人という容れ物、つまり境界そのものは維持される。それは日本人ではない人たちとのあいだに境界線が引かれているからです。

もし世界中に日本人しかいなくなつたら、「日本人」というカテゴリー(＝容れ物)に意味はなくなります。「日本人」は、「日本人ではない人たち」との関係においてはじめて「日本人」でいられるのです。

さらに「日本人」という境界は、つねに存在する絶対的なものではありません。たとえば、私たちはよく関西人はどうか、関西人のなかでも京都人はこうで、大阪人はこうだといった言い方をします。そのとき「日本人」としてのまともは無視されず。

「関西と関東は文化が違う」と言うとき、そこに明確な差異があることを疑う人はいません。その関西人と関東人の比較では、京都人と大阪人の違いは意識されなくなり、同じ関西人として均質な存在にされます。どういう境界線で比較するかで、「差異」そのものが変わるのです。

集団と集団との境界をはさんだ「関係」が、その集団そのものをつくりだしていく。「つながり」によって集団間の差異が

つくられ、集団内の一貫性が維持される。

ある輪郭をもった集団は単独では存在できません。別の集団との関係のなかで、その差異の対比のなかで、固有性をもつという確信が生まれ、それが集団の一体感を高める。それは、「わたし」が「他者」との交わりのなかで変化してもなお、「他者」との境界線をはさんで「わたし」であり続けるのと同じです。

他者との差異が集団としての一体感や持続性を生み出すように、「わたし」という存在の輪郭も、ひとつの感情や身体経験をひとまとめしておくために必要とされます。他者と交わることで輪郭が溶け出して交じり合ってしまうからこそ、その輪郭を固める装置が必要とされるのだと言ってもいいかもしれません。

精神科医の木村敏（きむらびん）（一九三二）は、統合失調症は「わたしがわたしである」ということに確信を持たなくなったときに生まれる病気だと言います（『自分ということ』）。「わたし」という存在の感覚は、だれにとつてもあたりまえに感じられるものではなく、それが失われることもある。私たちはその輪郭を維持しないと、とても生きづらくなるのです。

「わたし」の輪郭を維持する。そのことを身近な例に引きつけて考えてみましょう。たとえば、杖つえを使って歩いている人にとつて、杖は身体の一部のように感じられるはずで、メガネをかけているとき、そこで「見ている」のは「メガネ」ではなく、「わたし」だと思っているのも同じです。「わたし」の眼だけでは見えていないにもかかわらず、見ている「わたし」がはっきりと感じられる。

道具を使うかどうかだけではありません。私たちは音を自分の耳で聞いていると感じます。でも当然ですが、その音の振動を伝えているのは空気です。空気がまわりに充滿しているからこそ、音が届く。音はそれを発するものの振動とそれを伝える空気の振動、その震えを知覚する耳という身体器官との協働作業をとおして、「聞こえる」わけです。でも経験のレベルでは、「わたし」が聞いているとしか感じられない。

そもそも「わたし」の経験は外部の世界へと拡張しながら、それらとの交わりをとおして構成されている。私たちの身体的な境界は、つねに外部の「わたし以外のもの」と連動する開かれたものなのです。それでも、ふつうは「わたし」をしつかりとし

た輪郭のある独立した存在として経験できる。考えてみると、<sup>3</sup> けっこう不思議なことです。

(中略)

私たちは他者とつながるなかで境界線を越えたいろんな交わりをもちます。それによって変化し、成長することもできます。それは「わたし」という存在が、生まれつきのプログラム通りに動くようなものではなく、いろんな外部の要素を内側に取り込んで変わることのできるやわらかなものだからです。

<sup>4</sup> 「わたし」が溶ける経験を変化への受容力ととらえると、ポジティブに受けとめられると思います。さまざまな人と出会い、いろんなものをやりとりした結果として、いまの「わたし」がいる。

その出会いの蓄積は、その人だけに固有なものです。だれ一人として、あなたと同じ人と同じように出会っている人はいません。「わたし」の固有性は、そうした他者との出会いの固有性のうえに成り立っている。

(2) でもだからこそ、いまの「わたし」が不満な人は、それを悲観する必要もない。みんな気づかないうちにかつての「わたし」を捨て、こっそり他者からあらたな「わたし」を獲得しているのですから。

中学から高校に、あるいは高校から大学に入った途端に、自分のキャラクターが変わったと感じる。自分では意識していなくても、友だちからそう言われたり、友だちのそんな変化を目にしたりする。そういうことは、よくありますよね。

クラス替えがあつて自分を取り囲む人が変わるだけでも、自分が変化したように感じる。それは「わたし」という存在が周囲の他者によって支えられ、つくりだされているからです。

そもそも私たちは複数の「わたし」を生きています。たとえば、家のなかでは末娘として「甘えんぼう」と言われている人も、部活では頼れる先輩として後輩に慕<sup>した</sup>われているかもしれない。大学の授業では「生徒」として教室でおとなしくしている人が、バイト先の塾では「先生」と呼ばれ、黒板の前で堂々と話をするかもしれない。

私たちは、つねに複数の役割をもって生きています。それは、だれと対面するかによって、「わたし」のあり方が変化しうることを意味します。家族のなかの「末娘」は、「親」や「兄弟」との関係においてあらわれる「わたし」のあり方。部活の「先輩」は「後輩」との関係抜きには存在できません。先生と生徒も同様です。「生徒」の存在によって、その人は「先生」であることができる。

このようにすでに私たちは状況に応じて複数の「わたし」を生きています。そのどれがほんとうの「わたし」なのでしょう？ 人前では期待される役を演じていて疲れる。家に独りであるときの自分が気楽でいい。そう思う人もいるでしょう。(3) でも、だれとも関係を結ばない「わたし」が、ほんとうの「わたし」と言えるのか、ちよつと考えてみてください。すべての演じるべき役を脱ぎ去ったあとに、演じない本当の「わたし」がいるのか、いたとしてそれにどんな意味があるのか。これは考え<sup>5</sup>るに値する問いだと思います。

「アイデンティティ」という言葉があります。「自己同一性」と訳されますが、自分がつねに同一の存在であり続けるというのは、まさに近代の個人主義的な人間観です。演じる役をすべて脱ぎ去ったあとに、同一の揺るがない核のような「わたし」がいる。そんな見方に通じます。

小説家の平野啓一郎(一九七五-)は、複数の自分の姿をたんなる「キャラ」や「仮面」のようなものと考えてはだめなんだと言います。たったひとつの「ほんとうの自分」や A したぶれない「本来の自己」なんてない。一人のなかに複数の「分人」<sup>ぶんじん</sup>が存在しているのだと、本書の内容とも通じる議論を展開しています(『私とは何か 「個人」から「分人」へ』)。

英語の「個人 individual」は、「分割できる dividual」に否定の接頭辞「di-」がついている語で、それ以上分割不可能な存在という意味が込められています。この西洋近代的な個人とは異なる人格のあり方を示してきた文化人類学にとっても、じつは「分人 dividual」はとても大切な概念でした。

(中略)

さきほど説明したように、状況や相手との関係性に応じて「わたし」が変化するという見方も、まさに「分人」的な人間のとらえ方です。Bには、「わたし」のなかに複数の人間関係にねざした「わたし」がいる。だれと出会うか、どんな場所に身をおくかによって、別の「わたし」が引き出される。

ここで重要なのは、他者によって引き出されるという点です。それは「わたし」がCに異なる役を演じ分けられているとは違います。他者との「つながり」を原点にして「わたし」をとらえる見方です。

(4)でも「わたし」は「わたし」だけでつくりあげるものではない。たぶん、自分のなかをどれだけ掘り下げても、個性とか、自分らしさには到達できない。

他者との「つながり」によって「わたし」の輪郭がつくりだされ、同時にその輪郭から「はみだす」動きが変化へと導いていく。だとしたら、どんな他者と出会うかが重要な鍵になる。

「わたし」をつくりあげている輪郭は、やわらかな膜のようなもので、他者との交わりのなかで互いにはみだしながら、浸透しあう柔軟なもの。そうとらえると、少し気が楽になりませんか？

もちろんその「他者」は生きている人間だけとは限りません。身の回りの動植物かもしれませんし、本や映画、絵画などの作品かもしれません。いずれにしても、文化人類学の視点には、そんな広い意味の他者に「わたし」や「わたしたち」が支えられているという自覚があります。

この本でこうした「つながり」をベースにした人間観を考えてきたのは、その見方のほうが「正しい」と言いたいからではありません。ひとつの見方よりも、複数の見方を手にしていたほうが、「わたし」も「わたしたち」もともに生きやすくなるのではないかと考えているからです。複数の視点をたずさえておくこと。それこそが文化人類学的な知の技法の鍵でもあります。

※問題作成の都合上、文章を一部省略しています。また、文章中の小見出し等を省略したり、書体を変更したりしたところがあります。

注 侘び寂び……静かさや簡素さなどに見られる日本文化特有の美意識や感覚のこと。

問一 A にあてはまる四字熟語として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自画自賛      イ 意気投合      ウ 首尾一貫      エ 切磋琢磨

問二 B、C にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 個性的      イ 意図的      ウ 抽象的      エ 肉体的      オ 普遍的      カ 潜在的

問三 次の一文は問題文中から抜き出したものです。この一文を戻すのにふさわしい部分を問題文中の（ 1 ）～（ 4 ）の中から一つ選び、番号で答えなさい。

「人とは違う個性が大切だ」とか、「自分らしい生き方をしろ」といったメッセージが世の中にはあふれています。

問四

——線1「学生に「日本文化とは何ですか？」と聞くと、みんな同じように答えます」とありますが、筆者はなぜ学生たちの答えが同じようになるかと考えていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本にいながら今までほとんど関わりがなかった着物や華道、茶道、相撲、歌舞伎、侍、侘び寂びなどの日本文化に対して、学生たちが少なからず興味や憧れを抱いているから。

イ 昔も今も多くの日本人になじみがないものであっても、外国人とうち解けるためには、外国では見られない日本固有の文化を紹介することがふさわしいと学生たちが思っているから。

ウ 自分たちにほとんど関係のない文化であっても、日本発祥の文化や日本特有の文化こそが日本文化であるという考えが、学生たちの頭の中で無意識にはたらいっているから。

エ 大学の学生はその出身地が日本全国に及び、それぞれの出身地の文化を紹介すると差異が生まれてしまうため、日本人なら誰もが知っている日本文化を答えようとするから。

問五

——線2「わたし」という存在の輪郭」とありますが、この「輪郭」の特徴について、筆者の見解が最もよく表れている部分を問題文中より三十二字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問六

——線3「けっこう不思議なこと」とありますが、筆者はどのようなことが「不思議なこと」だと言っていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私たちが何かしらの行動や経験をする際は、「わたし」以外のものとのつながりを通じて行われているにもかかわらず、それらを意識することなく「わたし」という存在を感じていること。

イ 社会とのつながりの中で私たちは様々な「わたし」を生きているにもかかわらず、それらの「わたし」は単に演じている「わたし」にすぎず、確固たる「ほんとうの自分」が別に存在すると考えていること。

ウ レンズや空気といった「わたし」以外の存在なくしては感じることでできない視覚や聴覚の原理を知ることによって、一見関係なく思われる「わたしがわたしである」ことの必要性が実感できること。

エ 「わたし」以外のものと接し変化していくことよってのみ「わたし」はつくりあげられていくものであるのに、その「わたし」という輪郭をしっかりと保っていないと逆に生きづらくなってしまいうこと。

問七

——線4「わたし」が溶ける経験をく受けとめられると思います」とありますが、筆者はこの一文を通してどのようなことを伝えようとしているのですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 私たちは他者との出会いによって知らず知らず新しい「わたし」を手に入れていくので、現在の「わたし」が不満な人も悲観せず、とにかく様々な他者に出会うよう努力すべきであるということ。
- イ 家庭や学校や社会など、様々な場所で様々な役割を担うことによって私たちは複数の「わたし」を生活しているのだ、その中には自身で認めることのできる「わたし」がいるはずであるということ。
- ウ 「わたし」はこれまでの人生で出会ってきた他者からの影響によってつくられたものであるため、今の「わたし」に不満を抱いていてもそれは自分だけの責任ではなく環境のせいでもあるということ。
- エ これまでの様々な出会いによって「わたし」は成り立っているが、それは「わたし」の固有性をさまたげるものではなく、これからの出会いも含めて「わたし」に固有性を与えるものであるということ。

問八

——線5「これは考えるに値する問いだと思います」とありますが、なぜ筆者は「考えるに値する問い」だと言っているのですか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 多様性が求められる現代では、他に影響されない揺るぎない「わたし」の存在よりも様々な状況に応じて様々な「わたし」の存在を示せることが大切であると認識すること、社会で活躍していくことができるから。

イ 「わたし」の存在は他者とのかわりによつて見出されるものであると知ること、誰からも影響を受けていない「わたし」が本当の「わたし」であるという考えから自由になることができ、生きていきやすくなるから。

ウ 「アイデンティティ」という言葉に代表される西洋近代の個人主義的な人間観を知ること、「分人」という概念を含んだ文化人類学が提唱する正しい人間観を身につけることができ、人間関係で困ることが少なくなるから。

エ 独りで家にいるときではなく他者との関係性の中にほんとうの「わたし」は存在するため、どんなにつらいことがあっても他者とかかわらないと「わたし」の存在が社会の中で失われてしまうことになりかねないから。

問九

——線6「広い意味の他者に「わたし」や「わたしたち」が支えられている」とありますが、「広い意味の他者に「わたし」が支えられている」とはどういうことですか。七十字以上九十字以内で説明しなさい。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

視覚障害を持つマラソンランナーである内田は「記録よりもメダルを」と考える男だった。そんな内田に声を掛けられた淡島は、一時は企業の陸上競技部に所属していた有力なマラソンランナーであったが、現在はその企業に勤めながら個人の資格でレースに参加している。いつしか勝つことへのこだわりを持つことよりも「ペース配分やタイムなどを計画した通りに走ること」を目標とするようになっていた淡島であったが、「内田には二時間一〇分台で走るランナーが伴走者として必要だ」という話を聞き、伴走者になることを引き受けた。二人はパラリンピックの出場条件である国際大会での優勝をめざしてトレーニングを続け、ついにその本番レースを迎えることになった。この小説では国際大会を走っている場面に二人の出会いからこれまでの場面が挟み込まれるという構成になっている。問題文は、レース前日に、舞台となる南半球のある島の革命家の家を訪れた場面から始まる。

淡島は柵すきまに隙間がないかと邸宅の周囲を回った。路地の奥に邸宅を管理する者の詰めている小屋があった。淡島は小屋の中を覗き込み、浅黒い肌の老人に声をかけた。

1 「この男が邸宅の壁に触れたいと言っています」そう言って内田を指さす。

「誰も触れることはできないよ。外から見ただけだ」

むろん、初めからできる相談ではなかった。

「彼は視覚障害者なんです。見ることはできません」淡島は食い下がった。柵の外にいては革命家を感じることはできない。もっとも触れて感じることも思えないが、それでも内田の願いを叶かなえてやりたかった。

「なぜ目の見えない者がここに来たのだ」

「彼自身を変えるためです」

「お前は何者だ」

老人は怪訝けげんそうな表情になった。

「俺は伴走者です」淡島は胸を張った。「革命家にだって伴走者はいたでしょう」

伴走者はレースを共に走るだけの存在ではない。誰かを応援し、その願いを叶えようと思う者は、みんな伴走者なのだ。

内田の願いを叶えるのが、ここにいる俺の役割だ。伴走者としての俺の役割なのだ。淡島の必死の願いを聞き、老人は静かに目を閉じた。目尻から涙がこぼれ落ちる。

「儂わしが彼の伴走者だった。彼の革命をすぐ側そばで見つめてきたのだ」濁りのない瞳は淡島の遥はるか後ろを見つめているようだった。

老人は柵の扉に大きな鍵を挿さし門扉を開いた。門の開く音に内田の顔が緩む。

「建物までは三〇センチほどの丸い石で道がつくられています」淡島は素早く足元の状況を伝えた。ここで足を痛めてしまつては、わざわざ来た甲斐がない。内田は頷うなずき、ゆつくりと歩を進めた。

「ここに壁があるつてのは、わかるんだよ」

「見えなくても？」

「壁のある方向からは音が来ないからな」

「へえ」以前の淡島なら驚きを隠しただろう。障害者に対して失礼なことを言っているのではないかという怯おびえがあつたのだ。だが、今はそうした感情はなくなっている。おかしければ笑い、知らないことに出会えば驚く。当たり前のことだが、内田と長く付き合っている間に、ようやく素が出せるようになっていた。

「それが解わかるまでには、三年くらいかかった」

「音が無いことに気づくの？」

「最初のころは必死で音を聞いてたんだよ」

「今は聞いていないんですか」

「ああ。聞いていない。耳で見ている」

「見ている？」 淡島は首を傾げた。

「<sup>注1</sup> 暗眼者は周りの様子を見ながら、いろんなことを同時に把握するだろ。それと同じことだよ」

「同じことって」

「どこからどんな音が聞こえているかを意識せずに聞いている。言ってみれば、音で観察しているようなものさ。たぶん先天性の連中とは感覚が違うんだろうけどな」

暗眼者も何かを意識的に見ているわけではない。視覚の中に自然に入ってくるものから、様々な情報を受け取っているだけだ。この人はそれを音でやっているのか。

「それじゃ、俺がここにいることも」

「見えている」

「でも俺の顔を見たことはありませんよね」

「そりゃそうだ。いいか、お前は俺の頭の中では、かなりいい男にしてやってるんだから感謝しろよ」 内田はそう言って笑った。

淡島の案内で内田は建物きわの際に立ち、そと手で壁3に触れたあとしばらく黙り込んだ。淡島は何か問いかけようとしたが、彫像のように静かにその場に立ち尽くす内田の姿に声をかけることをやめた。

三六キロから三八キロにかけては道幅が極端Aに狭くなり、坂はそれまで以上に急になった。

坂を上りながら、巨大な墓道を回り込むように大きく右へカーブする。長いカーブなので、体のバランスが知らず知らずのうちに崩れてしまいそうになる。カーブが終Cわったところで道は一度平坦になる。急に足が楽Dになった。だがすぐ目の前に急な坂が待っている。

「まもなく最後の登坂です」 淡島が伝える。

ここだ。この坂だ。まるで壁がそびえ立っているように感じる。

「きついですよ、踏ん張って」そう言っEて淡島自身も腹に力を入れる。俺も辛い。ふくらはぎが悲鳴を上げそうになった。

急に内田の呼吸パターンが変わった。二度吸って一度吐く。かなり苦しいのだろう。あれだけの転倒をしたのだ。体に痛みが残っていないはずがない。

坂を上りきったところから、やや坂を下ったところにある交差点を左折する。海へ向かう一直線だ。ここでようやく平坦な道に戻るが、街路樹のシュロ以外に風を遮るものほとんどない道では、正面から吹き付けてくる風がレース終盤の体に重くのかかってくる。

前方にホアキン<sup>注2</sup>の姿が見えた。細い体が一回り小さくなったように見える。おそらくホアキンも相当苦しいはずだ。

淡島は、顎を引いて体の中心を懸命に保とうとしながら走る内田を見た。この人は、絶対に諦めない。

今、二人は一[X]同[Y]だ。腕の振りも足の運びも完全に一致している。歩数も歩幅も一寸と変わらない。手と手をつなぐ一本のロープから互いの気持ちが伝わってくる。

「走っている間だけ、俺は自由になれる」

内田はそう言っていた。だがそれでも淡島には内田の心の奥底にあるものが、まだわからない。

「いいか淡島、俺は死ぬ気で走るぞ」内田が声を出した。

「はい」

「お前は俺に勝つつもりで走れ」

バカにするなよ。淡島の胃がふいに熱を帯びた。俺だって現役4のランナーだ。負けるわけがないだろう。そう考えて淡島はハッとした。今まで勝ち負けよりレースをコントロールすることにこだわってきた俺が、内田に負けたくないと考えている。この俺が勝つことを欲している。

このまままっすぐ進み、海に突き当たったところで右に曲がれば四〇キロのポイントだ。広々とした道の先には真っ青な海が

見えている。両側には古いホテルが並び、客室の窓から覗く人々が大きく手を振っていた。

<sup>5</sup> あとは全力で走りきるだけだ。どちらが先にスタジアムに飛び込むかで勝負は決まる。

俺は信頼に応えるために走っているのか。伴走者はそのためにいるのか。

次々に変わる景色は遠く正面からやってきて、あつというまに左右へ分かかれ、そして後ろへと消えていく。その全てがまるでスローモーションのようだった。遠くに見える空も海も、沿道で声援を送る人も、木々や車や建物も、今そこにあるのにもかかわらず、ぼんやりとして輪郭が定まっていない。古い映写機がスクリーンに映し出す映像のように淡く柔らかな色彩が光に包まれている。淡島は走りながら、その光景をぼんやりと眺めていた。まるで眠っているような感覚だった。体が夢の中へ溶けていく。<sup>6</sup> 白昼夢を見ながら走っているようだった。右側から照りつける太陽の光が眩しい。淡島は思わず目を細めた。あれほど苦しかった呼吸が、いつのまにか楽になっている。

突然、あらゆる風景から色が消えた。ゆつくりと光が何かに遮られ、辺りが闇に包まれていく。淡島は目を凝らしたが、まるで何も見えなかった。目の前から全てが消えていた。

闇の中で淡島の目に映っているのは内田と自分をつなぐ一本のロープだけだった。その先にあるはずの内田の姿も、ロープを握っているはずの自分の手も見えなかった。他に何も無い空間で、ただ一本のロープだけが規則正しく振られ続けている。

いったい何が起きたんだ。淡島は混乱した。こんなバカなことがあるか。あまりの苦しさに俺は幻覚を見ているのだろうか。何も見えない恐怖。先が分からない不安。それでも淡島は、自分の見ている光景については何も口にせず走りつづけた。余計なことを言っつて内田を心配させてはいけない。

ふと淡島は、音に気づいた。

周りには誰もいないのに大きな歓声が左右から鳴り響いている。耳に意識を集中すると、歓声の中で自分自身の足音が一定の間隔を刻んでいるのがわかる。足音は心臓の鼓動と混ざり合い、複雑なリズムを奏でていた。そしてもう一つ。ああ、これは内田の足音だ。

暗闇の中で、そこだけスポットライトの光が当たったように内田の足がぼんやりと浮かび上がった。足から腰、背中の順に、次第に内田の体が輪郭を現し始める。肩から伸びた腕の先でロープがしっかりと握られていた。ロープの反対側にあるのは、俺の手だ。

今の淡島には内田とロープしか見えていなかった。

マラソンは自分との戦いだ。長い歴史の中で科学的なトレーニング方法が編み出され、競技のスタイルも大きく変わってきたが、それでも最後の最後にはやはり自分との戦いが待っている。

7  
だが俺たち伴走者は違う。

視界に光が戻った。目の前には海が広がっていた。青かった。この青さを内田にも伝えたい。淡島はそう思った。

海の手前にあるカーブを右に曲がればあとはスタジアムまでの直線だ。

「まもなく全力」淡島は声を出した。思わず叫びたくなる気持ちを抑える。ここで叫ぶ必要は無い。ただ走るだけだ。もういい。あとはどうなってもいい。この二キロを走り抜く。そのために俺たちはここに来たんだ。

内田のギアが入った。トップスピードで走り出す。速い。ここでまだこのスピードが出せるのか。なんとという体力だ。

「ホアキンまで二五」

ホアキンの背中がどんどん大きくなってきた。行ける。追いつける。このスピードなら必ず捕まえられる。

「行ける、行けます」

「うあああ」内田が吠えた。

あと一〇。スタジアムに入ればあとはトラックを一周するだけだ。なんとかそこまでに並びたい。

内田とホアキンは同時にスタジアムへ飛び込んだ。びつしりと埋め尽くされた客席から一斉に大きな歓声が沸き起こる。

淡島は自分の肉体の動きを内田に合わせることに集中した。俺は存在しない。今ここを走っているのは内田だけだ。俺も内田

だ。コンマ一秒たりとも動きをずらさない。一ミリも狂わさない。俺は完全に内田に一致する。それが伴走者だ。

淡島はちらりと横目でホアキンを見た。エンリケスと目が合う。苦しそうに顔を歪めていた。ホアキンとまったく同じ表情をしている。そうか。この二人も俺たちと同じなんだな。

ゴールまであと五〇メートル。淡島はそのことを内田には告げなかった。もうすぐゴールだと思えば気が緩むかも知れない。最後の最後まで、ゴールするその瞬間まで全力疾走するには、ゴールの位置は知らせないほうがいい。

走れ。走れ。走れ。走れ。

最後の瞬間、淡島はロープから手を離し、ほんの少しだけ後ろへ下がった。伴走者が先にゴールしてはいけない。

四人が塊となってゴールを駆け抜けると、競技スタッフの手からゴールテープがゆっくりと抜け落ちていった。音が消え、全てがモノクロームの映像のようになる。

「どうだ」荒い息のまま内田が聞く。

結果は淡島にもわからなかった。内田とホアキンは完全に同時に飛び込んだように思えた。電光掲示板の表示に目をやる。結果はまだ何も映し出されていない。確認しているのだろうか。それほどの僅差なのか。

一位の欄にホアキンの名が点灯した。歓声がスタジアムに響き、地鳴りとなって淡島の足を震わせた。

「そうか」淡島がまだ何も言わないうちに内田はそう言った。「負けたんだな」

この歓声は地元選手の勝利を祝うものなのだ。内田はゆっくりと腰を折り、膝の上に両手を置いた。丸くなった背中がまだ激しく上下している。

「本当にすみませんでした」淡島の目から涙がこぼれた。あるとき俺がちゃんと見ていれば、内田を転倒させなければ、まちがいなくホアキンを抜き去り堂々と金メダルを獲ることができたのだ。内田はパラリンピックへの切符を手にすることができたのだ。それなのに、俺のせいで、俺がちゃんと役割を果たさなかったせいで。思わず嗚咽が漏れ、息が苦しくなる。

「淡島」うつむいたまま内田が声を出した。

「なんですか」

「観客に挨拶だ」

淡島は顔を上げた。

「こっちです」淡島は内田の肘ひじを持って、メイン席の前に立たせた。

「一時の方角へ」観客のいる方向を教える。

頭を下げるのかと思いきや、内田はいきなり両手を高々と掲げ、そのまま大きく振った。まるで優勝したかのような態度だった。客席から大きな歓声があがった。

「すごい。すごいですよ」淡島は思わずスタジアムをぐるりと取り囲む客席を見回した。観客たちは誰もがその場に立ち上がり、手にしている旗や帽子やタオルを振り回していた。自国のヒーローと最後まで競った男を、暖かく祝福していた。

「ああ」内田はニコリとした。「見えている」

「え？」

「お前が見ているものを、いま俺も見ている」そう言って内田はそっと淡島の肩に手を置いた。「お前がちゃんと見てくれたら、俺にだって見えるのさ」

「俺は」

「お前は伴走者だ。俺の目だ」

俺は伴走者だ。そして、この人が俺の伴走者なんだ。

大会の運営スタッフなのだろう。若い女性が真っ赤なタオルを持って二人に近づいてきた。恥ずかしそうに目を伏せたままタオルを静かに差し出す。淡島は内田の背中に回り込み、受け取ったタオルを内田の両肩にふわりと掛けた。太陽の香りがした。淡島はもう一度客席を見上げた。その向こう側に広がる青い空に、小さな雲が二つ並ぶようにして浮かんでいた。

(あそつかも浅生鴨『伴走者』「夏・マラソン編」)

- 注1 晴眼者……視覚に障害のない人。
- 注2 ホアキン……内田のライバルで、この大会の優勝候補。
- 注3 エンリケス……ホアキンの伴走者。

問一 〰線A～Iの言葉を種類ごとに分類した組み合わせとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で

答えなさい。

- ア A E / B C I / D F / G H
- イ A E F / B C D / G H / I
- ウ A D E F / B C I / G H
- エ A E / B C H I / D F / G

問二 問題文中の  $\boxed{X} \cdot \boxed{Y}$  に入る漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問三 〰線1「誰も触れることは〰見るだけだ」とありますが、老人が最終的に門を開けてくれたのはなぜだと考えられま

すか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 淡島から、目の見えない者は触れて感じることにしかできないのだ、と何度も食い下がられてそのあまりの熱意に門を開けなければ何をされるか分からないと恐れを抱いたから。

イ 目の見えない連れの男になんとかしてこの邸宅の壁を触れさせてやりたい、と訴える淡島がその男の伴走者だと知り、昔の自分の姿を淡島に重ねて共感したから。

ウ 目の見えない男が遠い島国である日本で優勝目指して死に物狂いの努力をしていることを知り、革命に身を投じた若い頃の自分を思い浮かべて、内田の夢をかなえてやりたいと思ったから。

エ 自分たちが目指した革命に比べればスケールは小さいものの、異国の地で日本のマラソン界に革命を起こそうとしている目の見えない男に対して、自分も夢を託してみたいと応援したくなったから。

問四

——線2「濁りのない瞳は淡島の遙か後ろを見つめているようだった」とありますが、これは老人のどのような気持ちを表現していると考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 二人の男の故郷である遠い島国に思いを寄せ、二人が明日のレースで戦う様子を静かに応援したいという気持ちを表現している。

イ 二人の男の言動から明日のレースに何としても勝ちたいという熱意を感じ、二人が背負ってきた重圧や厳しい練習を思い浮かべて、心から応援したくなったという気持ちを表現している。

ウ 自分自身も淡島のように、何かを成し遂げようとする男の姿をすぐ側で見続け、ともに夢を持って生きた時があったことを懐かしく思う気持ちを表現している。

エ 革命家の家をわざわざ訪ねてきた内田の姿を見ているうちに、一緒に夢の実現に向かって走った無二の友である革命家の姿が目に見えなくなり、淡島の姿すら視界に入らなくなるほど革命家と過ごした日々を懐かしんでいる気持ちを表現している。

問五

——線3「淡島の案内で黙り込んだ」とありますが、この時の内田の心情はどのようなものだと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 明日のレースには何としても勝って、パラリンピック代表の座を自分のものにするのだという静かな闘志と熱い気持ちを抱いている。

イ 明日のレースを前にした緊張を和らげようとした結果、かえって自分のことを必要以上に話してしまったことを少し後悔している。

ウ 明日のレースに勝ちたいの言うまでもないが、それ以上に自分のことができることをやり尽くしたいという静かな思いをつのらせている。

エ 明日のレースにかける強い思いを抱いているが、一方で日本とは違う環境の中で、いつも通り「耳で見る」ことができるだろうかという不安と戦っている。

問六

——線4「淡島の胃がふいに熱を帯びた」とありますが、これはどういうことを表していますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これまで淡島は練習でもレースでも、内田のどんな無理難題にも応えてきたのに、大事なレースの最中に現役ランナーでもある自分をバカにするような言葉を投げかけられて思わずカッとなつて冷静さを失ったということ。

イ 淡島は内田のレースの勝ち負けよりも彼をコントロールすることに情熱をかけてきたのに、内田からかけられた言葉によつて、にわかはこのレースだけは内田に勝ちたいという衝動がわきあがってきたということ。

ウ 伴走者である淡島が内田よりも先にゴールすることが許されないことは分かりきっているのに、「俺に勝つつもりで走れ」などと挑発するようなことを言われる情けない自分に対して、憤りを感じているということ。

エ 一人のランナーとして出場するレースには勝負よりもレースをコントロールすることにこだわってきた淡島が、内田への反発を感じると同時に、自分の中に個人として内田に勝ちたいという気持ちが芽生えてきたということ。

問七

——線5「俺は信頼に応えるために走っているのか。伴走者はそのためにいるのか」とありますが、ここからうかがえる淡島の心情の説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「目の見えないランナーのために、自分のすべてをなげうって尽くすのは相手が信頼してくれているからこそである。しかし、その信頼に応えることで自分が評価されたいという軽薄な思いだけで走り続ける、そんな人生で良いのだろうか」と伴走者としての務めを果たそうとしながらも迷っている。

イ 「自分も現役のランナーである以上、やはり勝負には勝ちたい。しかし、自分が勝ってしまったのは伴走者としての役割は何も果たしていないことになる。伴走者である以上、勝負しようとする気持ちを持つことは、やはり相手の信頼を失うことになるのだろうか」とこれまでとこれからの自分の人生について疑問を抱くようになった。

ウ 「目の見えないランナーが伴走者を信頼するのも、伴走者はその期待に応えようとするのも当然だ。しかし、自分はまだ信頼に応えようという思いだけで走っているのではなく、自分も共にこのレースに勝ちたいと思っても良いのではないか」と一人のランナーとしての本能が目覚めてきた。

エ 「革命家の家に入れるように話をつけたり、私生活もレースでも内田の代わりに目となって生活を助けたり、研修のアドバイスをしたりと、ひたすら自分が共に走るランナーのために尽くしてきた。一瞬迷ったこともあったが、それこそ自分が望んだ人生なのだ」と自分に自信と誇りを持ち始めた。

問八

——線6「白昼夢を見ながら走っているようだった」とありますが、この部分からホアキンを視界にとらえるまでの間の表現は淡島のレース中のどんな状態を述べていると考えられますか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア レース中に生まれた様々な内田への思いもただひたすら走ることに集中しているうちに消え失せ、もはや二人をつなぐ一本のロープを頼りに、結果を気にせず、ただ内田とともに走ることに無上の喜びを感じるようになっていく。

イ レースも終盤になって、レース中の内田とのやりとりも忘れるほど疲れと照りつける日射しとで意識を失いそうになり、夢か現実かも分からない状態になっても、ひたすら内田を勝たせることだけに集中してゴールに向かうとしている。

ウ 科学的なトレーニング方法が主流となる中で、自分の練習方法はデータに頼らない勘に頼った方法ではあるが、むしろ精神面を鍛えられた結果、この灼熱のレースでも二人の間にあるロープだけに集中して気力だけで走り続けることができるようになっていく。

エ これまでの内田の横柄な態度への反発は消え、レース中にもかかわらず夢を見ているような時間の中で内田と一つになったような感覚を覚えた後、改めて現実のレースに集中して、ひたすらゴールをめざすことだけを考えるようになっていく。

問九 — 線7「だが俺たち伴走者は違う」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次

のA、Eの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 選手はただ伴走者の指示通りに練習をしてレースを走ればよいが、伴走者は自分との戦いだけではなく、事前の準備にも多大な労力を要し、一方レース本番では他の競技者との戦いのみ気を配らざるを得ないので、自分との戦いどころではないということ。

イ 選手は自分との戦いの先に記録やメダルといった結果がついてくるが、伴走者はまずレースを伴走するための自分自身の準備が必要で、そこですでに自分との戦いをすませていることもあり、選手のために走る本番のレースではとても自分との戦いに気持ちは向かないということ。

ウ 選手は伴走者とともにトレーニングやレースをすることで本番のレースでは記録をめざせるが、伴走者は科学的なトレーニングを構築することや、競技者のペースメーカーとならなければならないなど、とても自分自身との戦いをしているような精神的な余裕はないということ。

エ 選手はレースでの自分との戦いの先に勝利や記録といった得るものがあるが、伴走者は競技者の目となることを求められているのであり、レースに参加しているように実はレース自体には参加していないという立場である以上、そもそも自分との戦いの場が与えられていないということ。

問十 — 線8「この人が俺の伴走者なんだ」とありますが、淡島は内田を自分にとってどのような人物としてとらえている

と考えられますか。問題文全体を見て六十字以上八十字以内で答えなさい。

問題はこのページで終了です。



